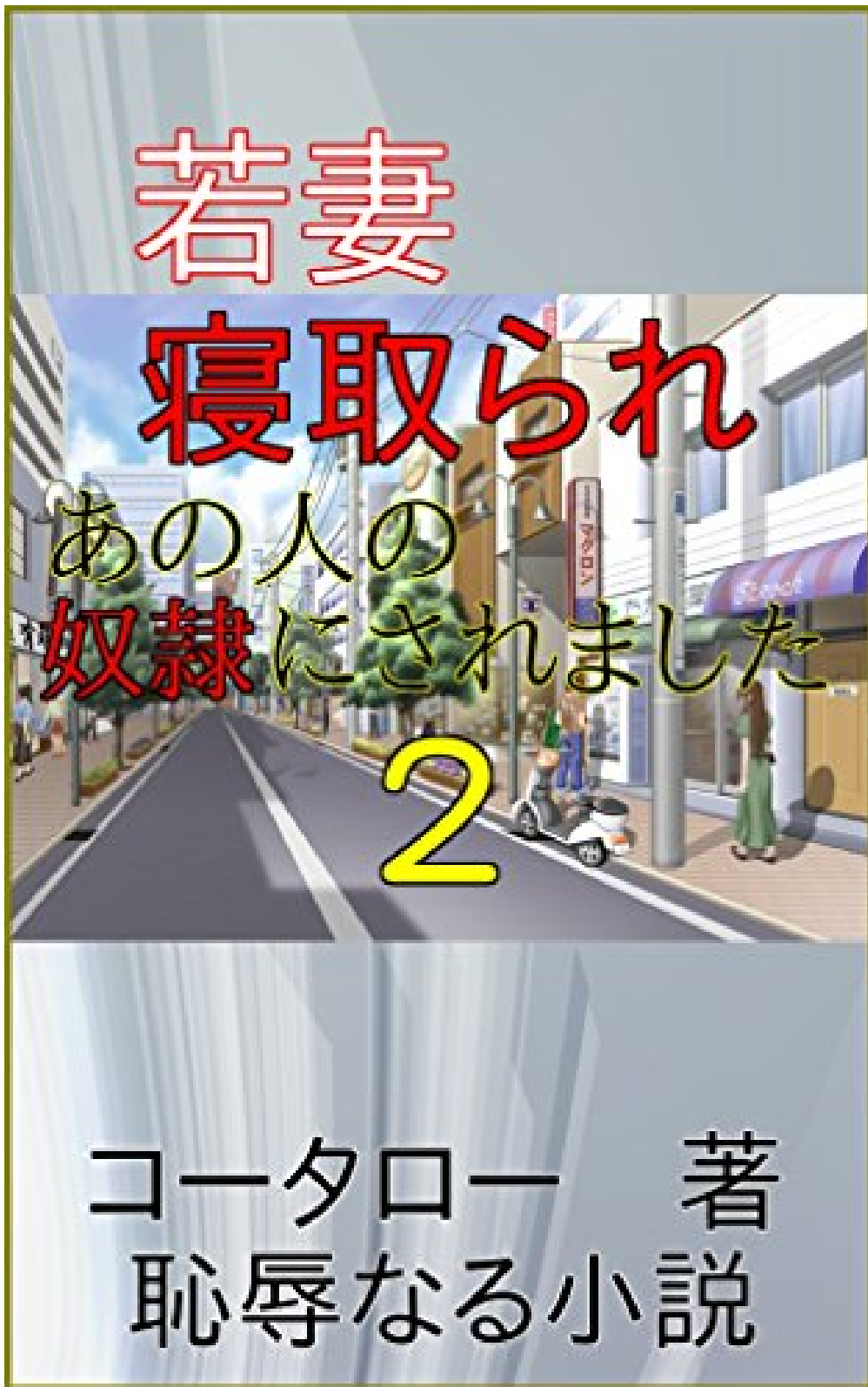


若妻・寝取られ～あの人の奴隷にされました 2 (恥辱なる小説)



発売日: 2017年4月14日

出版: コータロー

著者: コータロー

PDF

24才の美貌な若妻が凌辱される！
成熟した女の肉体を、他人の男にもてあそばれる！
愛する夫が仕事で汗を流しているころ、若妻は他人のペニスを啜えさせられ、恥辱の汗と涙
を流し……！

「ディルドとパイプだ。どっちを使う？」
「嫌です……どっちも使いたくありません」
「どっちをオマンコにはめる？ 俺が訊いているのは、それだけだ」
「……」
「自分で決められないのなら、俺が決めてやってもいいんだぞ。しかしその時には、これも
追加で綾音の穴に突っこんでやる。お前のケツの穴の方にな」
「ひい、ダメ……」
コロコロと軽い音がして、もう一つ淫具が追加された。
綾音の喉が引きつりの悲鳴を吐いた。
「そっちのディルドとパイプは大きいだろう？ アダルトショップの兄ちゃんに、『俺の腕
くらいのサイズだ』と言ってやったら、これを持ち出してきやがった。なんでも、フィスト
ファックの練習にも使われる代物らしいぜ。というか、綾音はフィストファックを知ってい
るのか？ あれはな、女のオマンコに拳をすっぽりと入れちまう……」

総文字数 40393字(本文のみ)

シチュエーション

若妻凌辱・人妻寝取り・女性器拡張オナニー・極太ディルド&極太パイプ・極小ブルマ・屋
外ローター責め

本作品は縦書きにて構成されています。

タイトル下の著者名(コータロー)をクリックしていただければ、既刊作品の一覧もご
覧になれます。

作品詳細は、著者が管理する『恥辱なる小説』まで。
発行全作品の詳細な紹介と無料体験版が閲覧できます。

<http://chijoku.red/>

【題名】

第1章 清めの膣穴は女の液を垂らして……

第2章 社長令嬢の秘密

第3章 若妻のオナニーには極太パイプを……

第4章 若妻の自慰は夫の目に晒しながら

第5章 拡張される膣穴～巨木ディルドに犯されて……

第6章 朝のラジオ体操はブルマ着用で……

第7章 崩壊する羞恥心

【登場人物紹介】

木下綾音（きのした あやね）

B 8 4 - W 5 8 - H 8 6 二十五才

本作品のヒロインであり、結婚してまだ一年余りの若妻。
スタイル抜群な官能的なボディに、どこか愛くるしさを覗かせる美顔の持ち主でもある。
人妻らしいおしとやかで慎ましい性格。
夫を想い、自宅マンションで自慰に耽っていたところを智道に目撃され、それをネタに女の
肉体を.....

皆川遥香（みながわ はるか）

B 7 8 - W 5 4 - H 8 0 十八才

智道が勤める水道工務店の社長令嬢である。
不況風が吹くなか、父親が経営する会社を支えようと、高校を卒業後は事務員として働いて
いる。
持ち前の明るさをバネに懸命にがんばっているが、そんな少女に卑劣な影が忍び寄り.....

神山智道（かみやま とみち）

水道工務店に勤める作業員。年齢は三十五才。
地方の高校を卒業後に都心の大学に進学。
しかし、折からの不況に煽られ、大学を出た後は派遣など様々な仕事を乗り継ぎ、現在は従
業員5人ほどの小さな工務店に身を置いている。
性欲は強く、時には強硬な手に打って出ることも。

木下和則（きのした かずのり）

綾音の夫である。
中堅どころの商事会社に勤務している。
結婚してまだ一年余りだが、勤めている会社の仕事に追われる余り、彼女との夜の営みは疎
遠に.....

タイトル下の著者名（コータロー）をクリックしていただければ、既刊作品の一覧もご
覧になれます。

【作品サンプル】

第3章 若妻のオナニーには極太パイプを.....

「ディルドとパイプだ。どっちを使う？」
ゴロンと音を立てて、床の上に淫具が転がされる。
男のペニスをリアルに模したソレが、膝をたたんで座る綾音の元で止まった。
「嫌です……どっちも使いたくありません」
それを一目見るなり、綾音は首を振った。
体力を激しく消耗し、漏らす声も弱々しいままに、それでもありありとした嫌悪だけは示してみせる。

「どっちをオマンコにはめる？ 俺が訊いているのは、それだけだ」
しかし、智道の物言いに変化は見られない。
スケベな単語に置き換えただけの問いを、うつむく綾音にぶつけた。
「自分で決められないのなら、俺が決めてやってもいいんだぞ。しかしその時には、これも追加で綾音の穴に突っこんでやる。お前のケツの穴の方にな」

「ひい、ダメ……」
コロコロと軽い音がして、もう一つ淫具が追加された。
綾音の喉が引きつりの悲鳴を吐いた。
「そっちのディルドとパイプは大きいだろう？ アダルトショップの兄ちゃんに、『俺の腕くらいのサイズだ』と言ってやったら、これを持ち出してきやがった。なんでも、フィストファックの練習にも使われる代物らしいぜ。というか、綾音はフィストファックを知っているのか？ あれはな、女のオマンコに拳をすっぽりと入れちまう……」
「ヤメテ……もう、話さないで……そんな話、聞きたくありません」
極太、長大なディルドとパイプを前に、智道は己の拳をドリルのように回転させた押し出した。

女を怖がらせ、淫靡な地獄へと突き落とす。
そんな過程に、つい饒舌になりかけた智道の声であったが、綾音がヒステリックに遮った。
「つ、使えば……それをわたしが決めて、アソコに入れれば……」
「わかってきたじゃないか。しかしな、オマンコに入れて終わりってわけじゃないぞ。ちゃんと感じてイッチまうまで、その玩具と遊ばないと」
男の手首くらい。

もしくは、レギュラーサイズの缶コーヒーの直径くらい。
自分の手で掴んで花卉の割れ目に挿しこみ、ズボズボとピストンさせるパイプと。
垂直にそそり立つソレを自らまたぎ、花卉の割れ目に挿しこんだまま腰をズブズブと上下させるディルドと。

ついにタイムアップとなり、智道の手に乗せられる最悪の時には、螺旋状の渦巻きを模した細長いアナル用のパイプまでねじこまれ……

「こっちの方を……バ、パイプを……」
「ふいっ、無難な方を選んだな」
その決断に時間はかからなかった。
智道が口を開く前に選択を。
震えの止まらない指先が、毒々しい青色をした極太な大人の玩具を指し示していた。

「んん……はあああ……」
覗いているだけで、シュルシュルと肌をこする薄布の音が聞こえそうである。
綾音がパンティーを脱いでいた。
前屈みになり、ブラジャーを外した乳房を落ち着きなく揺らせながら、乙女チックなピンク色のそれを足首のところまで下していた。
「素っ裸になったら、そこにしゃがむんだ」
一糸纏わない女体を晒そうとする綾音に、智道が指示を与える。
後ろ髪が垂れるほどうつむいた綾音は、返事をするでもない。

コクンと頭をうなずかせるでもない。
ふらついて危なっかしい重心のまま、穿いていたパンティーをつま先から脱ぎ取っていた。

タイトル下の著者名（コータロー）をクリックしていただければ、既刊作品の一覧もご覧になれます。

作品詳細は、著者が管理する『恥辱なる小説』まで。
発行全作品の詳細な紹介と無料体験版が閲覧できます。
<http://chijoku.red/>

<http://yep.pm/mbUmpJbd5/XgBpPenr0.pdf.rar>